

フットボール界に迫る持続化の危機

～サステナビリティとダイバーシティ～

研究目的として自身のオリジナリティが溢れるものを創作しようと考えた。その上でコロナによる被害で経済面の未熟さを露呈したフットボール界を今回、経済を組み合わせることで、執筆を試みた。

研究手法は主に著書やインターネット上の記事を活用した。自身の経験から信憑性の有無を確かめ、慎重に取捨選択を試みた。

サブタイトルとなっている持続化と多様化の定義として、持続化は長期的なスパンで地に脚をつけて経営をすること、多様化は年齢幅広く、国籍問わず多くの選手が活躍できることを指す。この場合、問題となってくるのは市場の過度な拡大。試合数増加に伴う過密スケジュールだろう。前者についてはある程度の割り切りも必要となってくるが、現在市場で起きている好景気は長続きしないだろう。その思考がクラブ同士連結をしてグループ化を進め、また若い選手を安価で獲得して成長させていくなど多様化に繋がってきた。後者は主にUEFA、FIFAに大きな問題がある。彼らを是正しない限り、この暴利は収まらない。そのためにも、クラブ主催で計画の進められているSL構想の実現が叶うことになれば大きな抑止力となるはずだ。

また、ビッグクラブと中小クラブの経済格差の広がりについても問題が挙げられるが、中小クラブにとってビッグクラブの存在は決して否定的なものではない。活躍している選手を高値で売るチャンスであり、放映権の価値を底上げする存在であるからだ。その思考を基に考察をするならば、一極集中で排他的と予想されるSL構想も否定的な意見と取ることは出来ない。ビッグクラブの中での競争に打ち勝つためにも濃密なリーグ開催は現在の市場背景を鑑みると不可欠であると考ええる。またSL構想はUEFA、FIFAと対立する構図になるため、試合数増加を抑制する効果もある。UEFA、FIFAによる暴動の前にメスを入れるタイミングは刻々と迫ってきている。

しかし地元のファンを蔑ろにしてはならない。クラブが強くなった故にサポーターになった人もいるだろう。しかしその逆も然りである。サポーターの存在がクラブにとって大きな資産となることはコロナ禍で多くのクラブが思い知ったはずだ。経済力が全てでもなければブランド力が全てでもない。地元に応援できるクラブがある。その基本的な構造を蔑ろにしてはならない。